2016年度　　JBBBCAWA

国　　語

注　意

1. 問題は全部で16ページである。
2. 解答用紙に氏名を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の ⬭ を塗りつぶしなさい。○で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり，折り曲げたりしないこと。

一　次の文章を読んで後の問に答えよ。

われわれが普通、ことばの意味と言っているのは、大体において、ことばに内在する意味と、聴き手や読者が了解している意味との二つの意味が同時に含まれている。それが意味の問題をあいまいにしている。

意味をことばの側にだけ認めようとするのも正しくないが、それかと言って、ことばに固有の意味を全く否定して、聴き手、読者が主観的な解釈を下して、それがことばの意味であると強弁するのも誤りである。

発話者、作者によって用いられることばには固有の意味があるけれども、それがそのまま聴き手や読者に受け取られるとは限らない。受容者によってニュアンスが付加され、ときには、新しい意味の代入が行われる。その両者の場において生ずるのが、いわゆる「意味」である。

A 意味はことばの伝達において生ずる一回性の現象であるということになる。発話者、作者がことばに託している有意性(M_1)は、聴者、読者がそのことばに与える習慣になっている有意性(M_2)とは、程度の違いはあれ、つねに差異がある。このM_1、M_2のどちらかの一つに、いちじるしく比重をかけたことばの理解は、ことばの機能をB ユガめることになる。われわれが日常、無意識に行っていることばの理解は、このM_1とM_2をつないで、伝達させているM_3という第三者的意味ができてはじめて成立するものである。M_1だけでもなく、またM_2だけでもなく、両者の兼ね合いのとれた点で浮び上ってくる一回きりのM_3が「意味」である。それは、具体的にとらえようとしても、とらえることのできないものである。

日常の言語生活で、$M_1 \downarrow M_3 \uparrow M_2$という関係がそれほどはっきり意識されないのは、$M_1$と$M_2$、すなわち、発話者、作者の言語的コンテクストと、聴者、読者のそれとの隔りが比較的に小さく、M_1、M_2、M_3がほぼ近似的であるためである。ことばが正しく伝わったというとき、何か、発信側から受信側へ一方的な伝達が行われているように考えられる。しかし、実際はそうでないらしいことは、絶えず起っていることばの誤解が、受信側から、ことばの意味としてもちこんでいるものによって起ることによっても明らかであろう。

M_1とM_2の距離が時代的に大きくなっている古典の文学作品においては、$M_1 \downarrow M_3 \uparrow M_2$の関係がいっそうはっきり、拡大された形で見られる。古典の研究はM_1の解明に全力を注ぐけれども、結局、M_1そのものには到達できない。したがって、［　a　］の究明は、それと［　b　］との間に、伝達の意味［　c　］を成立させることのできる程度に［　d　］を近づけることにほかならない。そして、その結果、理解されるものは、古典作品と読者のおのおのもつ意味の合力によって生れる新しい意味である。それは古典そのものでもなく、また、読者の世界そのものでもない。読者の変るにしたがって、変動するものであるが、まったくもとの姿を失ってしまうのでもない。時代と共に再生と変貌をつづける古典の性格がそこにある。

古典作品は日常の言語よりもずっと伝達が困難であるが、さらに極端なのは、未知の外国語で、そこではコミュニケイションの機能はまったく見られない。M_1はあってもM_2がないので、発話者、作者にとってはことばであるものが受信側にはことばではない。もちろん意味はわからない。

外国語とその初歩の学習者との間の距離も非常に大きいと考えられる。M_1とM_2との間にM_3が生じにくい。しかし、そういうことばに対しては、いわゆる意味をはなれて、ことばの形や文法に着目することが可能である。そういう段階にあることばが、C かえって研究の対象になりやすい条件にめぐまれていることは興味ぶかい。

*アメリカ・インディアンの言語を研究することから発達したアメリカの記述的な言語学が、意味の問題を一応後まわしにしていることは、自然なことと考えられる。

アメリカ・インディアンのことばが、英語を話すアメリカ人にとって意味の了解の困難な外国語であったからこそ、意味の介入をさけて、言語の形態、構造という点に研究を集中させることができたのである。

意味をコミュニケイションによって生ずるものと解してはじめて、日常の言語生活と、古典作品、外国語などの特殊な場合とを通じて一貫する考えで臨むことができるように思われる。

ここまでのべてきたことを文学に移して考えて見ると、作者(作品)の意味(M_1)と読者の意味(M_2)とがあって、両者の合力によって生ずるM_3が求められる文学の意味ということになる。M_2は無限といってよいほど多様であるので、M_3もまたそれに対応す

るだけのヴェアリエイションが考えられる。

ところで、文学においては、M_1とM_2の隔りが、ほかの日常の言語伝達の場合よりも大きいのがふつうである。ということは、M_3の成立が日常のことばにおいてよりも難しいということである。文学作品には、「わからないところ」が、日常のことばよりもより多くある。

そのわからないところは、実際には、二つの方法で克服される。一つは、読者の想像力の補償による処理である。この補充は、しばしば読者の自己投影である。

もう一つは、作者のM_1を究明することによって、伝達を容易ならしめようとするものである。用語などの研究はもちろん、作者の伝記、思想、時代環境なども重要視される。ここではM_2のもちこみは極力おさえられて、もっぱらM_1に比重がかけられる。

前者の読者の補充による理解に依存するのが、一般読者や批評の方法に通ずるとすれば、M_1を絶対視する後者の考え方は、アカデミックな文学研究の方法を支えているものである。

では、いったい、なぜ文学の表現は普通のことばよりも伝達が困難なのか。

文学では、つかい古されたことばを常識的に用いることを嫌う。それならば、どうして、ことばの新しい使い方がわかりにくいのかということになる。

詩などではことに、月並み、[e]ということが警戒される。作者はなるべく手垢のついていない言い方を心がけなくてはならない。一回しか起らないであろうような組み合わせでことばが用いられることも稀ではない。そういう一回性の高いことばのM_1に対してはM_2はきわめて不安定な関係になる。作者には意味があっても、読者にははっきりした意味が浮ばない。したがって、そこから生れるM_3もいちじるしく動揺する。これが文学の意味ははっきりわからないという印象になるのだが、文学が普通のことばとちがった特殊な新鮮なよろこびを与えるのもまた、同じく、このわからなさという点に起因しているのだから[f]である。

安定したM_3はM_1とM_2の関係が、大体、固定しているときに生れる。有意性はことばの反復使用によって保証されるものであ

る。いかなることばも一回きり用いられたのでは、受け取り手に意味を感じさせない。くりかえしくりかえし用いられているうちに、おのずから意味を生じて来る。ことばの意味は社会的契約である。

ことばについての慣例、契約は、そのことばの流通する社会が安定していて、［ g ］であればあるほどはっきり確立する。ことばはクラシックな明確さを帯びて用いられるようになる。$M_1 \downarrow M_3 \uparrow M_2$の伝達は次第に小さな円の中で起るようになるであろう。しかし、そういう安定へ赴く一方、ことばはその小さな安定の環を破って外へ出ようとする力をも秘めている。文学に用いられることばは日常の言語生活の伝達の場をはずした伝達をねらっているが、それは、この遠心力によるところが大きい。

遠心力に乗ったことばの使用は、M_1とM_2の隔りが不安定であるから、自然、受信側にはわかりにくくなる。そうすると、こんどは、それをわかりよくするために、文学の内部において、別種の契約、約束、慣習が次第に形成されて来る。それが文学の様式であり、技法であり、総称すれば、コンヴェンションである。もともとは言語の社会的契約の固定を嫌って生れた文学のことばだが、このように自らの契約の確立を求めないではいられない。伝達の宿命である。

一般に、ことばの意味と呼ばれているもの、すなわち、辞書的意味は、すでにのべた社会的契約、あるいは文学的契約によって、独立性の強くなったM_3の化石的姿であるとしてよい。辞書的意味が化石的なものであることは、辞書にある訳語をそのまま用いると、ひどい誤解をまねくことがある例によっても裏付けられる。

ことばはかならず形式をそなえている。そして、形式は認識できる。意味は形式に優先しない。形式ははっきりしていても、意味はそれに対応するほどにはっきりしているとは限らない。ことばは生れて間もないうちは、かなり振幅の大きいM_3を担いうる、あるいは意味の不明瞭な音声（文字）形式として存在する。ついで、そのことばがくりかえし用いられていると、次第に有意性が高まって、概念がはっきりし、さらに洗練を受けると、明確な辞書的意味ができ上がる。

その辞書的意味をさらにくりかえし用いていると、情緒的意味が生れる。ことばを充分長い期間、そして、しばしば使用していると、もとの意味からは説明のつかないような要素がそなわって来る。

たとえば「附属」ということばがある。これは「ものにつき従うこと」の意味の名詞である。これが附属中学校とか附属病院のよ

うな形容詞としての用法で多くつかわれるようになった。そしてある期間を経るうちに、慣用と社会的通念として、附属学校（病院）が特別な学校（病院）である、ということを承認するようになって、「附属」には、もともとなかった、そして、論理的にも導き出せない「特別の（あるいは優秀な）」という情緒的意味が生れる。

同じことは、どこの国のことばにもあることで、イギリスのパブリック・スクールは、文字の示しているような公立の学校ではなくて、私立学校であるが、さらに、この「パブリック」は、元来の概念とはなれてしまって、今日では「名門の、上品な」というほどの意味に受けとられている。

こういうニュアンスはなかなかとらえにくい二次的な意味で、もちろん翻訳を拒んでいる。実際に、「附属」とか「パブリック・スクール」の「パブリック」などは、ほとんど固有名詞化して翻訳不可能なものになりつつある。

これを要するに、言語形式としてのことばに、時間と使用頻度という要素が加わると、抽象的意味が生ずる。その抽象的意味にさらに時間と使用頻度の要素が加わると、情緒的ニュアンスが発生する。そしてこの情緒的ニュアンスは翻訳不可能なもので、ついには固有名詞的なものになると考えられる。ここに時間、使用頻度といったのは、社会の文化のことにほかならない。

ことばは、それが属する社会の文化のもつ圧力の中で、中核的論理的意味から、外延的な情緒的な意味を派生して行く。外延にある情緒的要素を生かした文学のことばが*アントランスレイタブルな性格をもっていることは以上によっても明らかであろう。

E 詩の翻訳は理論上、不可能である。

（外山滋比古『外山滋比古著作集2』による）

〔注〕

*アメリカ・インディアン＝南北アメリカ大陸先住民の総称。ネイティブアメリカン。

*アントランスレイタブル＝翻訳不可能。

問一　傍線部A「意味はことばの伝達において生ずる一回性の現象である」の説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 1 。

① ことばの意味は、〔発話者／作者〕が〔聴者／読者〕に伝える何かしらのメッセージであり、メッセージの伝達は一方向的になされるものであるということ。

② ことばの意味は、〔発話者／作者〕が伝える意味と〔聴者／読者〕が理解する意味とのずれを含むものであり、常に誤解を生むものであるということ。

③ ことばの意味は、〔発話者／作者〕が託す意味と〔聴者／読者〕が了解する意味との相互作用から生まれるものであり、非固定的なものであるということ。

④ ことばの意味は、歴史的に変化するものであり、〔発話者／作者〕が伝える意味と〔聴者／読者〕が了解する意味の隔たりの度合いは時代によって異なるものであるということ。

⑤ ことばの意味は、〔発話者／作者〕ごとでその内容が異なるものであり、〔聴者／読者〕は〔発話者／作者〕に応じた意味の理解が求められるということ。

問二　傍線部B「ユガ」にあたる漢字を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 2 。

① 曲　② 矮　③ 潰　④ 歪　⑤ 揺

問三　空欄 a 、 b 、 c 、 d に入れる記号の組み合わせとして最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 3 。

① a＝M_1　b＝M_2　c＝M_3　d＝M_2
② a＝M_1　b＝M_3　c＝M_2　d＝M_3
③ a＝M_2　b＝M_1　c＝M_3　d＝M_1
④ a＝M_2　b＝M_3　c＝M_1　d＝M_3
⑤ a＝M_3　b＝M_1　c＝M_2　d＝M_1

問四　傍線部C「かえって研究の対象になりやすい条件にめぐまれている」とあるが、筆者がそのように考える理由として最適なものを、次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 4 。

① 未知の言語は、絶滅保護の対象となっている分、豊富な研究資金による詳細な調査が可能であるため。
② 未知の言語は、コミュニケイション機能が未発達な分、文法が単純で記述しやすいものであるため。
③ 未知の言語は、意味の理解に困難が伴う分、言語の構造的な側面に研究を集中させることができるため。
④ 未知の言語は、外来言語による影響が比較的少ない分、言語の本来的な特徴が取り出しやすいため。
⑤ 未知の言語は、それが使用される社会・文化が単純な分、古来からの単純な言語状態を保持しているため。

問五　空欄 e に入れる最適な言葉を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 5 。

① 冗長　② 逸脱　③ 特殊　④ 単純　⑤ 陳腐

問六　空欄 f に入れる最適な言葉を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 6 。

① 滑稽　② 皮肉　③ 稚拙　④ 曖昧　⑤ 優美

問七　空欄 g に入れる最適な言葉を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 7 。

① 閉鎖的　② 論理的　③ 経済的　④ 循環的　⑤ 伝達的

問八　傍線部D「言語の社会的契約の固定を嫌って生れた文学のことば」の説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 8 。

① 文学では、辞書に掲載されていることばを使うことが好まれないということ。
② 文学では、不安定な社会の中で優れた作品が生み出される傾向が強いということ。
③ 文学では、型にはまった技法や書式を崩すことが好まれるということ。
④ 文学では、使い古されたことばを常識的に用いることが嫌われるということ。
⑤ 文学では、時代を超えた普遍的価値を持つ作品は評価されないということ。

問九　傍線部E「詩の翻訳は理論上、不可能である」とあるが、筆者がそのように考える理由として最適なものを、次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 9 。

① 詩は、国や文化によって形式が大きく異なるものであるため。
② 詩は、日常の言葉とは質の異なることばが使われるため。
③ 詩は、論理的意味を表すことばの使用が見られないため。
④ 詩は、翻訳する際に、元の言語の影響を多分に受けやすいため。
⑤ 詩は、情緒的意味が最大限生かされた文学形態であるため。

二　次の文章を読んで後の問に答えよ。なお文中に古文があるが、現代語訳を補ってある。

神話の英雄たちの後裔[A]として、その本流を受け継ぐ者たちを昔話のなかから挙げろと言われれば、誰もがまず「一寸法師」と「桃太郎（桃の子太郎）」の名をおもい浮かべるだろう。「一寸法師」はすでに古く御伽草子[*]の一冊として普及し、「桃太郎」も江戸時代中期の赤本[*]以来なじみ深い昔話であった。どちらも明治以降の国定教科書に採用されて読まれ続け、現在も何種類もの絵本となって子どもたちに親しまれている。たとえば、御伽草子「一寸法師」の発端は次のように語り出されている。

中ごろのことなるに、津の国難波の里に、おほぢとうばと侍り。うば四十に及ぶまで、子のなきことを悲しみ、住吉に参り、なき子を祈り申すに、大明神あはれとおぼしめして、四十一と申すに、ただならずなりぬれば、おほぢ、喜び限りなし。やがて十月と申すに、いつくしき男子をまうけけり。

さりながら、生れおちてより後、背一寸ありぬれば、やがて、その名を、一寸法師とぞ名づけられたり。年月をふる程に、はや十二三になるまで育てぬれども、背も人ならず。

【現代語訳】中ごろの昔のことなのだが、摂津の国の難波の里に、爺さんと婆さんが住んでいた。婆さんは四十になるまで子どものいないのを嘆き悲しみ、住吉大社に参詣し、子どもをほしいと祈願すると、神様はかわいそうだとお思いになって、四十一歳だというのに婆さんは子を身籠もったので、爺さんはたいそう喜んだ。そして十か月たったころ、婆さんはうつくしい男の子をもうけた。

しかしながら、生まれたのちも身長が一寸[B]のままなので、その子の名を一寸法師と呼ぶようになった。そのまま年月がながれ、もう十二、三歳になるほどまで育てたけれども身長はいっこうに人並にならない。

主人公一寸法師が神の子として語られるのは、神話の英雄たちが貴種[*]として描かれていたのと同じことである。彼らは共同体[C]

の外から訪れる者だからこそ、普通の人とはちがう異常な力を秘めた存在になりうるのである。そして、その異常さが〈小さ子〉という姿によって示されるのもパターン化した語り口である。

ここでは、一寸ほどの身長で生まれた子は、十二、三歳になってもいっこうに成長しない。これも神の子の異常性を語る様式としてあるのだが、こうした状態は、英雄神話の主人公たちに見られた横溢する力のケンゲンの裏返しだとみればよい。スサノヲやヤマトタケルのように抑えきれない力として現わされても、一寸法師のように成長しない姿として描かれても、そこにみえてくるのは、共同体にはおさまりきらない異常さという点で等価なのである。神話の英雄たちの場合にはその力が表に現われてくるが、一寸法師の場合にはその力は秘められたままなのである。

「桃太郎」もやはり神の子として共同体に寄りついてくる。よく知られているように、桃太郎は婆さんが川で洗濯をしているときに川上から流れてきた桃の実に入っている。これも異境からよりついてくる貴種だという点で、一寸法師とおなじ異常な誕生を語っているとみればよい。桃の実のなかに入っていたと語るのだから、桃太郎もやはり〈小さ子〉なのである。絵本などでは子どもを大きくするために桃を異常な大きさに描くことも多いが、元来は一寸法師とおなじような小さ子であったとみなければならない。

「桃太郎」の場合にはいつまでも大きくならないという語り口は少なく、逆に異常なスピードで成長してしまったり、成長はふつうの子と変わりないが異常に強かったとか、反対に悪いことばかりしていたとか怠けてばかりいたというように、いろんな語り方がされている。それはどのように語っても同じことで、そこから読めてくるのは英雄の条件としての横溢する力のバリエーションとして説明できるのである。

神話の英雄たちは宇宙や国家の秩序を危うくする存在として父や兄や姉たちから共同体を追放され、異境へと向かう。一寸法師も、先の御伽草子ではいつまでも成長しないので老夫婦からウトんじられ出ていけと言われて、刀にする針と舟にする椀をもらって都にのぼって行くことになる。昔話「一寸法師」の場合には老夫婦が追放するという語り口は少ないが、あるとき少年は家を離れて旅にでる。また「桃太郎」でも、発端の設定がいたずらな子や怠け者の主人公となっている場合には家を追われると語ら

れることが多い。異常な力を秘めた神の子は、いつまでも共同体に住みつづけることができないのである。そして村落の側にとっての異境である都や鬼が島に行くことによって、神の子の異常な力は十分に発揮されることになる。

そこで語られるのは、鬼退治に代表される勇敢な戦いと［　a　］である。「一寸法師」ではどちらか一方しか語らない場合とその両方を語る場合とがあるが、「桃太郎」は鬼退治だけである。それは、「桃太郎」という昔話が勇敢な少年とサル・キジ・イヌという援助者の動物たちを語ることによって、どちらかといえば幼児を対象とした昔話という性格をつよくしているために、結婚というモチーフを要求しなくなっているからであろう。それに対して、「一寸法師」は御伽草子以来の伝統をもつ分だけ少年の成長物語という性格がつよく、そこでは英雄神話と同様に、少年の成長の証しとして欠かすことのできないヲトメとの結婚を語ることが多いのである。

鬼から奪った異境の宝物である打ち出の小槌によって一瞬のうちに異常な成長をとげた後に、一寸法師は高貴な姫君と結婚する。これは象徴的な語り口で、十二、三年もの間、小さいままに少年（というより幼児といったほうがいいかもしれないが）から抜けられなかった一寸法師が、共同体を離れて異境に行き、そこでの勇敢なはたらきによって試練を通過することで、はじめて少年を脱することができたのである。姫君との結婚はその証しであり、村落の英雄一寸法師は鬼退治ののちに立派な男に成長するのである。そのことは、鬼退治をして宝物をもって爺と婆のもとに帰る桃太郎も同様である。

貧しかった老夫婦は豊かになり、主人公はすばらしい結婚相手と子どもたちをえて繁栄する。それは、F昔話を語りつぐ共同体の人びとの願望としてこれらの主人公が存在するからだといえようか。それが現実とは遠いものだとしても、これらの昔話を語り継ぐ親たちやそれを聴く子どもたちにとって、彼らは自分たちの夢を託すことのできる理想の英雄だったのである。

英雄の条件としてもっとも大事な要素である〈知恵〉についていえば、御伽草子「一寸法師」の主人公はなかなか知恵のある〈小さ子〉である。一寸法師は家を出て都に行き、「三条の宰相殿」の屋敷に住むことになるが、そこには十三歳になる美しい姫君がいる。

一寸法師、姫君を見奉りしより、思ひとなり、いかにもして案をめぐらし、わが女房にせばやと思ひ、ある時みつものの打撒取り、茶袋に入れ、姫君の臥しておはしけるに、はかりことをめぐらし、姫君の御口にぬり、さて、茶袋ばかり持ちて泣き居たり。

【現代語訳】一寸法師は、姫君を一目見たときから恋に落ち、何とかして知恵をしぼって自分の女房にしたいものだと思い、あるとき、貢ぎ物の米を取って茶袋に入れ、姫君が眠っている隙に、計略をめぐらし、米つぶを姫君の口に塗り、自分は空の茶袋だけを持って泣いていた。

一寸法師が泣きながら自分の食料を姫君がとって食べてしまったと言うのを聞いた宰相が姫君にたしかめると、その口には証拠の「うちまき」が付いている。怒った宰相は、姫君を追い出してしまえと一寸法師に命じる。[b] 一寸法師は、事情がよく飲み込めずに困惑している姫君を連れて都を出て、姫を舟に乗せて難波に行こうとすると途中に嵐に会い、「きやうがる島(風変わりな島)」に漂着し、そこで例の鬼に出会うのである。

この、寝ている女の口に米粉やきな粉を塗っておいて、自分の食べ物をとられたといって騒ぎ女を自分のものにしてしまうというモチーフは、〈[c]〉と紙一重のところにある〈知恵〉だといわなければならない。

また鬼に出会って勇敢に戦う場面でも、正面から刀を交えるのではなく、鬼が一寸法師をひと飲みにすると体のなかを駆けまわり針の刀で鬼を懲らしめたと語られるわけで、それは体の小さいことを強調するばかりでなく、一寸法師がそれを[d]知恵をもっていることを示すための語り口なのである。「桃太郎」がきび団子をもって旅に出て、動物たちをお伴にして鬼が島に行き、そこで三匹の動物たちのもつ力を引き出し、それを利用して獰猛な鬼たちをやっつけてしまったと語られるのも、やはり英雄の知恵につながる語り口であるはずだ。とくに、鬼に象徴されるような、力がすべてという相手を打ち倒すためには、ぜひともこの種の知恵が必要なのである。真っ正面から戦いを挑むのはただの武勇譚であり、英雄は知恵こそがすべてだということになる。

(三浦佑之『昔話にみる悪と欲望』より)

〔注〕

＊御伽草子＝室町時代に流布した童話的な作品群の総称。

＊赤本＝江戸時代中期に流布したおとぎ話を題材にした絵本の総称。

＊貴種＝高貴な血筋を持つ者。故郷を離れて流浪し困難を克服してゆくという説話の類型的主人公。

問一　傍線部A「後裔」の意味として最適なものを、次の①～⑤より選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 10 。

① 支流　② 末端　③ 変形　④ 子孫　⑤ 傍系

問二　傍線部B「一寸」とあるが、「一寸」を含む「一寸の虫にも五分の □」ということわざがある。□ に適する漢字を次の①～⑤より選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 11 。

① 魂　② 心　③ 命　④ 涙　⑤ 怒

問三　傍線部C「共同体の外から訪れる者」と同じ意味になるものを、次の①～⑤より選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 12 。

① 異郷から流れ寄る貴種
② 共同体に招かれる運命の異常者
③ 横溢する力を発揮して訪れる赤子
④ 外界から通過儀礼のために寄りつく英雄
⑤ 流浪しながら人々の夢をかなえる〈小さ子〉

問四　傍線部D「ケンゲン」にふさわしい漢字を次の①～⑤より選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 13 。

① 兼験　② 権限　③ 検源　④ 健元　⑤ 顕現

問五　傍線部E「ウトんじられ」のカタカナ部分にふさわしい漢字を含むものを次の①～⑤より選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 14 。

① 隔離　② 軽率　③ 信頼　④ 疎外　⑤ 嫌悪

問六　空欄 a に入れるのに最適なものを、次の①～⑤より選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 15 。

① 異常な成長
② 知恵による機転
③ 大量の宝物の獲得
④ 援助者の動物たちの活躍
⑤ すばらしい女性との結婚

問七　傍線部F「昔話を語りつぐ共同体の人びと」とあるが、なぜ彼らは昔話を語りつぐのか。答えとして最適なものを、次の①～⑤より選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 16 。

① 貴種に対するあこがれを子孫にも引きつがせることができるから。
② 現実では果たされない願望を理想の英雄たちがかなえてくれるから。
③ 夢の実現には異常な力と知恵とが必要であるという教訓を伝えるため。
④ 理想の英雄の活躍を語ることで現実の厳しさを忘れることができるから。
⑤ 英雄は異郷から現れるが共同体にとどまれない運命を持つことを伝えるため。

問八　空欄 b に入れるのに最適なものを、次の①～⑤より選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 17 。

① 姫君に同情した
② 思わぬ展開にあわてた
③ 嘘がばれるのを恐れた
④ 思い通りになったと喜んだ
⑤ 偶然の恋の成就に勢いをえた

問九　空欄 c に入れるのに最適な語句を、次の①～⑤より選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 18 。

① 慢心　② ずるさ　③ うぬぼれ　④ 純情　⑤ 計画

問十　空欄 d に入れるのに最適な語句を、次の①～⑤より選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 19 。

① 逆に利用する
② 不利と考えない
③ 戦略として用いない
④ 限界として熟知する
⑤ 相手に感じさせない

問十一　桃太郎が鬼と戦って勝った理由として**正しくないもの**を、次の①～⑤より**一つ**選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 20 。

① きび団子を持って旅に出たから。
② 鬼が力だけの相手に過ぎなかったから。
③ お伴の動物たちの力を引き出して戦ったから。
④ きび団子によって動物たちをお伴にしたから。
⑤ 英雄は知恵こそがすべてであると心得ていたから。